

## 83 言語随想 ヨーロッパの諸言語

口下手なのは、言葉に敏感すぎるからだろうか。日本語の『アクセント辞典』を出している NHK でアナウンサーの発音を聞いているのは、アクセントが辞典と違うと家人に文句を言う。あるいは、字幕に、現代の逆接の接続助詞「のに」や「が」が使えるのに古い逆接助詞「も」が現われると、その変則用法に眉をひそめてしまう。逆接助詞は、「行ったが、会えなかった」のように、動詞や活用する助辞につけるのが原則だが、活用しない名詞の直後にさえいきなり古語「も」が登場する。字幕に適切な言葉を入れるゆとりがある場合でも変則な使い方をしている。生かじりに復古調を好む記者が、新聞の見出しで字数を減らすために始めたのだろうか。古文や漢文訓読になじみのなくなった世に、納戸の奥から引っ張り出された古風な逆接助詞「も」が、文法に違反してまで横行するようになった。文章に気をつけるべき報道関係者がそれをしている。だれかが注意する必要があると思うけれども、大野晋や丸谷才一さんのような人が今はもういない。

というように、わたしの関心は言葉に向かいがちである。三月初めにも、『共通語の世界史 ヨーロッパ諸言語をめぐる地政学』という書物を読んだ。それを「蝶の雑記帳」の次の題材にしようという心づもりでいたら、多事のうちに体調をくずして、多くの時間を安静に過ごすはめに。二か月経ってようやく

生活のリズムがもどり始めたので、身心のエクササイズをぼつぼつ再開した。

\*1

『共通語の世界史 ヨーロッパ諸言語をめぐる地政学』について記憶を呼びもどすために、日記に書きとめていた感想を読んでみた。その短い断片をつなぎあわせて何とか一つの文にしてみよう。

ヨーロッパがたくさんの国々から構成されていることは知っていたが、この書物が語る言語の豊富さに圧倒されて認識を新たにした。著者C・アジェージュは、感心するほどの力量で存在したヨーロッパの諸言語を余すところなく採りあげる。そして、記述に長短の差はあるけれども、それぞれの言語の特徴を語り尽くそうとしている。

冒頭で嘆いたように、長く生きれば人間は、言語が言語自身のもつ揺らぎによって変遷していくことを知る。その上、それぞれの言葉を話す集団が生活している場所を拡散したり、ときには遠くへ移住したりすることが歴史上起きた。そうして、異なる言葉を話す人間集団の接触も生じ、言語を変化させてきた。社会集団の政治的な競合は言語だけによって起きるのではないが、相手の言葉が異質と感ずるほどだと、集団の接触は政治的なきしみを生じ、場合によっては戦闘を引き起こす。強い集団が弱い集団を同化したり排除したりすれば、それによって、

ある言語が広域に広がったり、他方の言語が場所を局在化あるいは移動させられたりする。言語が消失することもある。そういう出来事は地理的な事象として起きるので、地理は言語の歴史に不可分の要素として関係する。だから、各々の言語がそれぞれに遭遇した運命によってどのような道程をたどったかを記述すれば、どうしても歴史や地理を語ることになる。歴史に関心の強いわたしは、言語についてのその語りのうちに歴史の響きを増幅して聞きとった。

そうだけれども、この本の日本語表題には首をかしげる。訳者あとがきに、原題を直訳すれば「言語の息吹き—ヨーロッパのことばの道程と運命」だと書いてあり、両者を比較すれば、日本語題名が原題の表現する意味と印象からずれていることが判る。仮に言語についての書名リストにこの二つが並べられていたとして、同じ書物だと気づくのはむずかしいだろう。通読してみて、原題の方が書物の内容にふさわしく、伝えたかったことをよく表現していると思う。上で考えてみたことから当然だが、言語をめぐるこの本は歴史や地理に深くかかわっている。しかし、「ヨーロッパのことばの道程と運命」を「地政学」と言い換えては、関心を政治的な問題に誤誘導してしまう。たしかにヨーロッパ語から共通語になったものはいくつかあるけれども、それも記述しているからといって、この書物は「共通語の世界史」を考察しようとしているのではない。訳者は言語学者なのに、読者を拡大するための出版社の提案に押しきら

れて、言葉を変更したのだろう。

ともかく、これほど多くの言語について、地政学にとどまらない多くの関連する要素をからめて記述していくのを読めば、大きな森を隈なくトレッキングしているような感覚になる。ヨーロッパについてまだまだ知らないことがたくさんあるのだ。消化不良だが、わたしは、言語にまつわる人間と社会と国家の歴史について多くの知識を得ることができた。長い歴史の道程で人間たちがどんな状況と立ち向かったか、想像すべきことがたくさんある。

著者は、ヨーロッパの諸言語をいとおしむように、その多様な歴史を記述している。その姿勢が「言語の息吹き」という表題に表出されているのだ。もちろん、現在の状況を見つめることが重要である。言語間の相互作用は、当然、ヨーロッパ共同体の全体的な問題と関係する。しかし著者は、いわゆる地政学だけにその問題を見ているのではない。多様な言語の存続を肯定し、歴史的ヨーロッパの本質をなす多様性が保持され発展することを願っているのだと思う。

とつづってみたが、これ以上思索を展開することができない。大部分の内容に触れずじまいである。その内容を窺い知ることができるように、目次の便覧をつくっておこう。

第一部「連合言語」の第一章「ヨーロッパの共通語」で採りあげられるのは、ラテン語・カスティールヤ語・イタリア語である。これにエスペラント語が加えられていることも言い忘れ

てはいけない。これらの言語は現代では後景に退いている。続く三章で、現代重要な地位を占める英語・ドイツ語・フランス語の過去と現在を考察する。英語は、イングランド語とアメリカ英語の二重性をもつのだが、現代の世界共通語となったアメリカ英語のことはほとんど課題に含まれていないので、記述の分量も少ない。そこで、現代ヨーロッパで中心的な役割を果たすべきドイツ語とフランス語のことが語られる。フランス人の著者は、中世以来のフランス語をふりかえり未来を展望しようとする。そして、東方でゲルマン民族出現以来の言語のたどった歩みを見つめる。そこでは、ドイツ語の道程が主軸になるのだが、スラブ語派とのかかわり、また、イディッシュ語とユダヤ語を話した人々の運命も記述される。

第一部はヨーロッパの言語で目立つものだけしか取り扱っていないから、「ヨーロッパ諸言語の豊かさと錯綜」を記述するために第二部が立てられている。地理的にヨーロッパの中心からはずれる四周で言語の錯綜が保存されているが、それらがみな採りあげられる。流浪の民ロマ人の言葉（インド・ヨーロッパ語族に属する）や四万五千人の話者しかいない北極圏のラップ語（サーミ語）も省かれない。

第三部の表題は、「ヨーロッパの諸言語とナショナリズムの挑戦」である。第七章で、「言語の運命への人間の介入」について予備的考察を置き、十九世紀の革命が言語に及ぼした影響に触れる。続いて、「言語が民族をつくる」さまは、スラブ諸国・バルト地域での言語の分岐と、フィンランド語とハンガリ

一語の変遷で描かれる。「民族が言語をつくる」側面について、ノルウェーで国家の独立が言語を整備させたことが語られる。他方、国家に組み入れられて話者の減った言語が、現在も存続の努力を続けていることも語られる。著者は“小さな言語”の息吹まで聞こうとしているのだ。オランダやウエールズにもわたしの知らなかった言語があることを教えられた。

第八章は、まず、ここまで採りあげなかったロシア語をテーマとする。その表題は「ロシア語、または再統合した帝国」である。ロシアの歴史をふりかえりながら、ロシア語が支配しようとする面と帝国に組み込まれた多くの言語が保存された経緯が記述されている。今も、ロシア連邦内と周辺国で、諸言語がロシア語との相互作用のもとにある。表題の「再統合した帝国」が、現在の東方にも、ロシア帝国以来のロシア語とほかの諸言語との競合が問題としてあることを示唆している。それは、ヨーロッパ共同体にいる著者の視点を表わしているだろう。このあと、「欲求不満の場」という表題で、マイノリティの地位にある諸言語を採りあげ、そこから生まれるナショナリズムを考察している。

## \*2

上記の書物を読んだあと、ヨーロッパの言語の系統をもっと知りたいと思った。インターネットで探索すると、「Lexical Distance Among the Languages of Europe」という系統図が

見つけた（図1）。そのインターネット上の図には出典が示されていないが、「語彙的距離」という言葉が、語彙を統計学的に比較する手法で得られた系統図と教える。言語間の近さ遠さを「語彙的距離」という指数に表わして、諸言語の系統関係を平面上に配置して表現した図である。関係の強弱が、それぞれの言語を結ぶ直線の種類によって可視化してある。

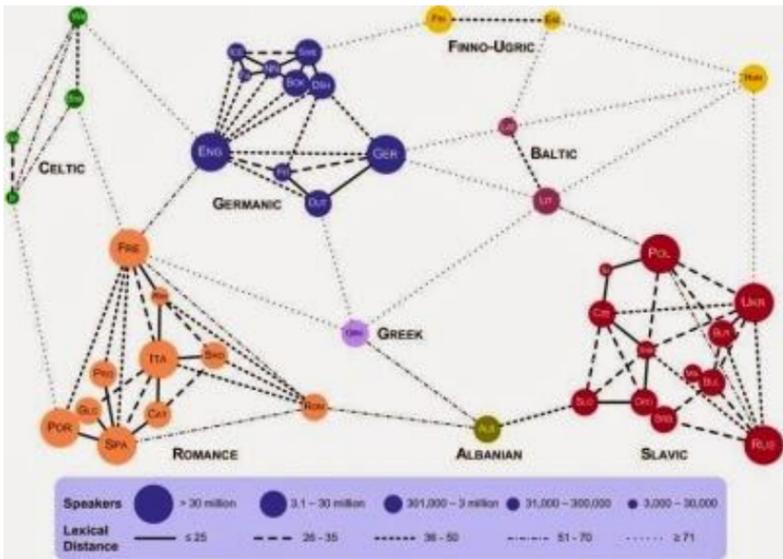


図1 etymological-lexical-distance among the languages of Europe

縮小しすぎて不明瞭だが、以下、この図を読み取りながら学習してみよう。ヨーロッパ語の主要なグループを形成するロマンス語派・ゲルマン語派・スラブ語派が三か所を占めて骨格を

つくっている。それぞれのグループ内で、諸言語の関係は、おおよそ地理に似せて表現されている。たとえば、ロマンス語派では、イタリア語が中心にあり、フランス語・イベリア半島語・ルーマニア語が三角形の頂点に来る。ゲルマン語では英語とドイツ語が両極にあって、スカンディナヴィア諸語とオランダ語などが上下に配置されている。そして、英語はフランス語から大きな影響を受けているので、それを表現しようとするれば、ロマンス語派とゲルマン語派は、フランス語と英語が向き合うように配置されることになる。

第三グループのスラブ語派は、ゲルマン語派・ロマンス語派の順に疎遠だが、ドイツ語が東に進出した歴史が影響しているので、ゲルマン語派とスラブ語派は、ドイツ語とポーランド語・スロバキア語・チェコ語が向き合うように配置される。しかし、バルト海南岸には、かつてドイツ語に駆逐されたプロシア語があったし、現在のリトアニア・ラトビアにつながる人々がいたのだから、それを表現しようとするれば、ドイツ語とポーランド語を結ぶ線のあいだにバルト語派の言語を描く必要がある。そのバルト語派は、ポーランド語とつながりはうすく、ドイツ語とはさらに疎遠なのだ。

ロマンス語派とスラブ語派の関係を図示するには、ルーマニア語とスロベニア語を相対させるのがよいらしい。ここでわたしが初めて知ったのは、ロマンス語派とスラブ語派のあいだにアルバニア語が来るということである。バルカン半島で今でも孤立傾向にあるアルバニア語は、スロベニア語と近い関係にあ

るけれども、スラブ語派に含まれないのだ。アルバニアがスラブ諸国と歩みを同じくしない原因は言語にある、と知った。

以上の関係が、地理に似せた系統図1で、ロマンス語派・ゲルマン語派・スラブ語派三つのグループの位置を決め、各グループ内での諸語の配置を少し変形している。その図にバルト語派とアルバニア語を入れるために、スラブ語派は地理的位置よりも東(右)の方にずらしてある。まだ、現在も多くの人の使用するケルト語派とフィン・ウゴル語派が残っている。この図では、ヨーロッパに先に入ったケルト語派が新来のラテン語とゲルマン語に浸食されて西北の辺境に押しやられたことを表示するように、フランス語と英語の左上方に描かれている。他方のフィン・ウゴル語派は、ウラル山脈あたりからフィンランド周辺に達した、と理解されている。フィンランド語は西でスカンディナヴィア諸語に接し、また、エストニア語は南のラトビア語と境を接しているので、フィン・ウゴル語派はその地理的關係を表わすように図の右上方に描かれる。ところが、ずいぶん遅れてハンガリー平原に侵入した集団が、もう一つフィン・ウゴル語派のマジャール語を中欧近くにもたらした。そのハンガリー語は、フィン・ウゴル語派に属していることと、ウクライナ語に近接していること示すために、地理關係を無視して図の右上端に置かれている。

さて、ここまでヨーロッパ諸語を概観してきたが、慧眼の人

から、重要な言語をまだ言っていないではないか、とおしかりを受けるだろう。そう、ヨーロッパ人のほとんどがヨーロッパ文明の淵源はギリシアにあると考えるはずなのに、ギリシア語の名をまだ出していない。『新約聖書』は、古典語から変化したとはいえギリシア語で書かれたし、ずっと後世まで、ギリシア語は教養ある人々によって使われてもいたのに。

もちろん、そういう重要な言語がヨーロッパ諸語の系統図に書かれていないはずがない。実際、ギリシア語は系統図のほぼ中央に置かれている。多くのヨーロッパ語の中にギリシア語起源のものがあるから、語彙の重なりに注目すれば、関連の線は諸語に伸びるのである。ところが、それらの関連性は、一つの言語を除いて弱く、ドイツ語とバルト語派との疎遠さに近い。ギリシア語は、その例外の言語を除くヨーロッパの諸言語と、系統の上で遠い関係にあるのだ。ギリシア語と一番関係の深い言語はアルバニア語で、その関連性はフランス語と英語の近縁性程度あるらしい。これはなかなか興味深い問題である。

### \*3

言語の親疎は、祖語からの分岐の年代に大いに関係していると考えられる。そこで、言語の時間的な系統樹をインターネットで探した。すると、堀田隆一という人の「hellog～英語史ブログ」に、#1129「印欧祖語の分岐は紀元前 5800-7800 年？」という記事が見つかった。それは 2012 年に書かれたもので、

2003年の「nature」に載った Russell D. Gray and Quentin D. Atkinson の論文「Language-Tree Divergence Times support the Anatolian Theory of Indo-European Origin」に基づくという。

上記「hellog #1129」によれば、その研究は、インド・ヨーロッパ語族の 87 言語の約 2500 の単語を比較対象に選んで、諸言語の分岐年代を、進化生物学のモデルを援用して統計的に分析したものである。進化生物学のモデルは、蓋然的ながら分岐の年代を算出するので、言語について時間軸をもつ系統樹を描くことを可能にする。その系統樹がヨーロッパ諸語の系統関係について先の系統図とよく似たものになるのは、語彙を統計学的に処理する手法を用いる点で共通するからだろう。ところで、地理的要素を反映している先の系統図は、ヨーロッパの歴史展開との整合性をもつと考えられ、語彙以外の比較検討もある程度なされているはずだから、ヨーロッパ諸語の系統について相当の蓋然性をもつとしてよいだろう。すると、その系統図に似ている新しい系統樹も、相応に信頼できることになる。とくに、そのモデルが、書かれた歴史時代に起きたヨーロッパ内の諸言語の分岐年代をわりあい再現しているとすれば（おそらく、モデルはそのように調整されているだろう）、もっと古い時代に対して誤差が大きくなるとしても、得られた分岐年代はある程度の蓋然性をもつと期待してよいだろう。このように想定すれば、時間軸のある系統樹によって、ギリシア語の孤立性がどのようにして出現したのかを知ることができるかもしれない。

その考察を進める前に、一つ準備をしておこう。

地域を異にする言語のあいだの差異は、もともと一つの言語にあった複数の方言が大きく分離することによって生じたと想定することが可能である。すると、時間をさかのぼって諸言語の分岐を考えれば、それらの言語を使用していた集団の地理的な分離をあわせて考察しなければならない。そういう考え方が生まれたのは、インドで、その地の言葉が英語に似ていることが発見されてからである。そこからインド・ヨーロッパ（印欧）語族という概念が生まれ、印欧語の故郷はどこで、どのような経過をたどって遠いインドとヨーロッパとで異なる諸言語となったのかという問いが立てられた。

ブログ「hellog #1129」は、印欧祖語の原郷からの拡散について、考古学者による二つの仮説を短く紹介している。一つは、印欧語の拡散は半遊牧的な「クルガン文化」のBC4000年紀から始まる伝播によるとする説で、もう一つは、BC6000～7500年から始まるアナトリア（現在のトルコ）からの農業伝播によって印欧祖語が拡散したとする説である。前者では、印欧祖語の原郷は、クルガン文化が興った、黒海-カスピ海(-アラル海)の北側の平原と想定される。こちらは、わたしも知っているほどよく聞か説である。後者では、印欧祖語の原郷はアナトリアあたりということになる。

上の二つの仮説を知った上で、こんどは、Gray-Atkinsonの

言語系統樹から学習しよう。古い時代の分岐だけ孫引きすれば、  
図2のようになる。

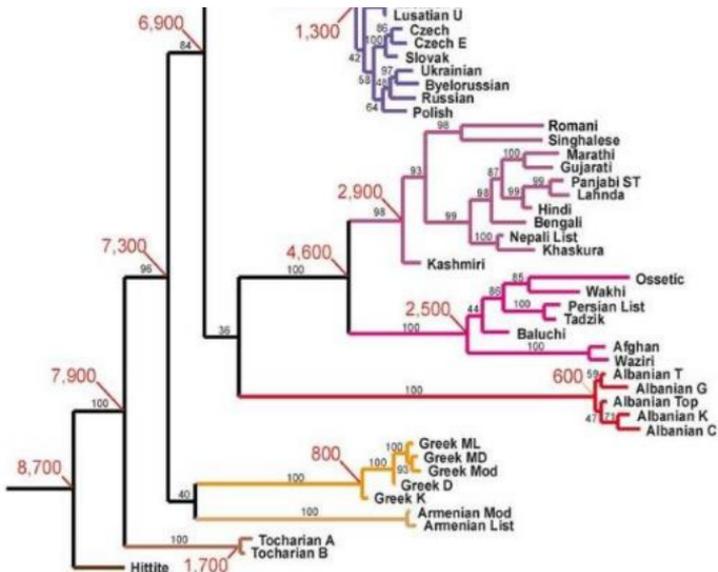


図2 インド・ヨーロッパ語族の系統樹(部分)

系統樹は、一つの根元から始まって時間の経過とともに次々に起きた枝分かれを示す図である。言語の場合にも、われわれの注目が初期に起きた出来事に向かうのは自然なことだ。その系統樹によれば、印欧祖語の最初の分岐が生じたのは BC6700 年ころで、二つに分離した一方がヒッタイト人の言葉だというのは印象深い。ヒッタイト王国が出現したのはアナトリアで、

BC1700年ころのことらしい。ヒッタイト語が独自の進展を始めたのはそれよりも5000年も前のことだとしても、ヒッタイト社会の発展の前史を考えれば、分岐が生じたころの話者たちがアナトリアから遠くないところにいた可能性は高い。それで、GrayとAtkinsonは、自分たちの系統樹が印欧祖語の原郷をアナトリアとする説を支持すると考えたのだろう。

しかし、ブログ「hellog #1129」も言うように、印欧語の原郷についての二つの説は、アナトリアでBC6000～7500年から始まり、クルガン文化圏でBC4000年紀から始まるとするので、Gray-Atkinson 系統樹は後者の説に必ずしも矛盾するわけではない。アナトリアとクルガン文化圏は、黒海とカスピ海のあいだの回廊によってつながっている。そこにはコーカサス山脈が横たわっているけれども、印欧祖語を話していた人々がコーカサス山脈の南から北に広がっていったと想定することも可能である。

Gray-Atkinson 系統樹は、ヒッタイト語と分岐した他方の言語群からトカラ語が分岐したのがBC5900年ころとする。消滅したトカラ語が話された場所は、今の中国のウイグル族地区で、原郷からかなり遠い。イラン・アフガニスタン・インド方面の言語の分岐はBC2600年ころとされているから、トカラ語の東進はそれとは異なる道程をたどったのだ。トカラ語と分岐した他方の言語群から、イラン・アフガニスタン・インド方面の言語群とヨーロッパ方面の言語群が生じた。Gray-Atkinson 系統

樹は、それを BC4900 年ころとする。この分岐を解釈するには、それらの言語の祖語を使用していた人々は、まだ、コーカサス山脈あたりからその北の草原にいたと想定するのがよいだろう。イラン・アフガニスタン・インド方面へは、コーカサス山脈の南からイランへ出るルートが考えやすい。ヨーロッパ方面へは、黒海の北の平原を西に進んだのだろう。ヨーロッパ文化に牧畜の要素が濃いのを理解しやすい。

ところが、Gray-Atkinson 系統樹によれば、その分岐が生じるよりも前の BC5300 年ころ、ギリシア語とアルメニア語との祖語が分岐したらしい。このことは、ギリシア語とアルメニア語が、ほかの印欧諸語と少し疎遠なことを意味し、先のヨーロッパ諸語の系統図で、ギリシア語が孤立していた理由を説明できる。そして、分岐の年代がほかの言語よりも古くヒッタイト語の分岐に近いことと、ギリシア語とアルメニア語がアナトリアの西と東に定着したことを考え合わせると、二つの語がアナトリアに興隆したヒッタイト文明と近い関係にあったと考えられる。アナトリア西部には、古代ギリシアが栄えたころ印欧語族のリュディア語を話す王国があったし、現代でもアルメニア西南のアナトリア南部とその周辺に印欧語族のクルド語が残っていることも、ギリシア語の原郷がアナトリアにあったことを示唆する。ギリシア語は、ほかのヨーロッパ諸語と異なる時期に、アナトリアからバルカン半島に入った可能性が高い。

もう一つ、先の系統図でヨーロッパ諸語の中で最もギリシア

語に近いとされたアルバニア語が、イラン・アフガニスタン・インド方面へ向かった言語と分岐した語だということも興味深い。これらの言語の祖語がコーカサス山脈あたりにあったとすれば、アルバニア語も、黒海の北の平原を西進したヨーロッパ諸語の流れとは別のルートを通してバルカン半島に至ったのだらう。だが、その移動は、おそらくギリシア語の移動とは別の時代に起きたのだ。

イラン・アフガニスタン・インドの諸言語とアルバニア語との語群が分岐した残りの言語群から、ギリシア語とアルバニア語を除くヨーロッパの諸言語が生じたことになる。そこから、BC4500年ころスラブ語派が分岐し、残りの言語から、BC4100年ころケルト語派が分岐した。残った最後の言語グループが、BC3500年ころゲルマン語派とロマンス語派に分岐した、というのが Gray と Atkinson の描いた系統樹である。

わたしの言語についての随想は以上のように進んだ。しかし、語彙を材料に統計学的に系統を探る方法は、語彙をどのような基準で何語選ぶかなど最初の設定によって左右される。まだ多くの試行や検討が必要だらう。

けれども、ギリシア語の出自について想像するための手がかりをいくらか見つけたような気がするので、古代ギリシアの文化についてももう少し考えてみよう。ヨーロッパの人々は、自分たちの文化が古代ギリシアを継承したものだと考えているだ

ろう。しかし、インド・ヨーロッパ語族がアナトリアあたりを原郷とするのだとしたら、その祖語を話した人々が先進のメソポタミア文明に多くを負っていた、したがって、ヨーロッパ諸語を話す人々の文化の基層に西アジア起源のものがあつた、と考えるのが自然である。ことに、ギリシア語がおおよそアナトリアもしくはその近辺で形成されたとすれば、ギリシア語の形成途上にあつた人々にはいっそうその考えが当てはまるだろう。

ギリシア文化についてこの考えをさらに進めると、その基層だけのことでなく、時代がくだって、古代ギリシアが盛期を迎える前の時代にも、その地理的な近さから、先進の西アジアとエジプトから人・物・文化が流入したと考えるべきだろう。アテナイのアクロポリスの神殿一つとっても、それは明らかである。祀られているアテナ神はアフリカ北岸の生まれだという伝承まであるのだ。つまり、ヨーロッパ人がその文化の淵源と考える古代ギリシア盛期の文明は、多くを西アジアとエジプトの文明に負っているのである。文明の伝播とはそうしたものだろう。

一応結論すれば、現代のヨーロッパ諸言語の中で孤立しているギリシア語も、インド・ヨーロッパ語族の展開の歴史を追えば、一定の時間的・地理的位置づけが可能だということである。さて、言語についてわたしの次の関心は、これまでのところ系統が明らかでなく孤立したままにされているもう一つの言語

へ向かうけれども、その日本語の系統論は門外漢が窺い知ることができるほど整理されていないようだ。

2019年6月29日